

雨

ライアン・ユーング

八時十三分、家を出ています。「ポツポツ」と降っています。私は、雨が嫌いです。

八時十八分、バスに乗ります。走っていたので、かさを使っても服やくつがぬれました。私は、雨にぬれるのが嫌いです。寒くなるし、くつがぬれて気持ち悪くなるからです。

八時三十八分、窓の隣の席に座ります。窓からいつも見える景色が、今は見えません。窓に落ちる雨粒以外は、何も見えません。「多分、誰か曇りの上で泣いているでしょう」と思っています。私も、誰かと一緒に泣いて、誰かに私の悲しみを感じてもらいたいです。でも、できません。誰かを困らせたくないです。「あなたはわかりませんよね。」

九時二十一分、バスを降ります。雨が強くなりました。めがねが雨で覆われているので、道をあまり見られません。雨の音以外は、何も聞こえません。私は、誰もいないような世界で歩いています。雨が、私に現実の重さを思い出せるように当たっています。自分が助けられるのは自分だけのことを思い出させてくれます。

九時三十分、教室に着きます。電気をつけて、いつもの所に一人で座っています。「疲れた」と言いました。やっぱり、雨が嫌いです。